

# 第一四九話

## 頼光朝臣逝去事

『前太平記』下 卷第二十三 七〇頁から七一頁より

生命は必ず死ぬという世の常は今に始まったことではなく、驚くことではないと

生者必滅の習ひ今に始めず、

驚くべきに非ずと雖も、

いっても、とりわけ悲しく思われたのは、摂津守源頼光朝臣の逝去である。その人

殊に悲しく覚へしは、

摂州朝臣源頼光の逝去なり。

其為人

は生まれつき普通ではなく、勇敢さはとりわけ秀でていて、知恵深さは同じように

尋常ならず、

勇敢最も秀一にして

智謀又無双なり。

二人としない。素晴らしい天下の御守護であったが、生まれ老い病み死することの

目出度き天下の御守りたりしか共、

生老病死の

進みは逃れることはできず、重病が体を侵して今が限界とお思われになる。子息や

漸免るゝこと能はず、

重病身を犯して今を限りと見へ給ふ。

公達

一門の者は言うまでもなく、四天王を始めとして、代々の家臣やそうではない郎等

門葉は云ふに及ばず、

四天王を始め

譜代の家臣、外様の郎従

も気を取り乱して、治療や看病はどうして余分なところがあるだろうか、その手立

心を天に惑はして、

医療看病争でか残る所有るべき、

其術を

てを尽くすといっても、全くその効き目もなかった。子息や四天王をお呼びになっ

尽くすと雖も、

更に其験も無かりけり。

公達・四天王を召して、

て、亡くなった後のことを詳しく仰って言い残し、治安元年七月二十四日、享年六

亡からん跡の事共委しく宣ひ置きて、

治安元年七月廿四日、享年六十八

十八歳で、とうとうご逝去なされた。こうなることは前もってわかっていた人々

にして、

遂に逝去し給ひけり。

斯くとは予て思ひ儲けたる人々も、

も、今始まったことのように、天を仰ぎ地に臥し泣いて悲しむ。道理であるのだ

今始めたる事のように、

天地に俯仰し泣き悲しむ。

理なるかな、

よ、生涯情け深い政を慈愛をもって下の者たちを使役し、一子のように慈しみ育ま

生涯仁政慈愛を以て下を使ひ、

一子の如く撫育し給ひしかば、

れたので、誰も（彼の死を）惜しまないという人はいない。過ぎ去った天禄元年、

誰か惜しみ進らせずと云ふ者なし。

去んぬる天禄元年、

満仲朝臣が職を辞した後、十七歳で家業を継ぎ (老)、朝廷の守護として、天下の武

満仲朝臣致仕の後、十七歳にして家業を継ぎ、大内の守護として、天下の武将将として選ばれ、千丈が岳の妖鬼を鎮圧し<sup>(貳)</sup>、伊吹山の凶賊を成敗し<sup>(参)</sup>、市原

と撰ばれ、千丈の妖鬼を鎮め、伊吹の凶賊を征し、市原の野の狡童を誅殺し<sup>(肆)</sup>、その他にも戦果を挙げて、数える事ことの暇もない(ほど

狡童を誅し、其余の戦勲勝て数ふるに違あらず。に成果が多い)。兵を従わせ、旗を前に進める地は、穏やかにならないということ

軍を靡かし、旗を進むる所として、静謐を致さずと云ふこと無し。はない。位階は四位に至り、内裏への昇殿を許され、九カ国の受領を歴任し、鎮守

位四品に至り、内の昇殿を聴され、九箇国の受領を歴、鎮守府府将軍<sup>(伍)</sup>に任命され、任国は全て安らかでないことはない。知恵と勇気の権化の

将軍に補せられ、任国悉く穏やかならずと云ふこと無し。智勇権化の良将である。

良将たり。

数日の間、あれほど(頼光朝臣の)お命に代わり(死に)申し上げようと心に誓っ

日はさしも、御命に代はり進らせんと契りたる、た、従者たちも側近も、黄泉への旅路に付いて行くこともできず、泣きながら廟所

諸従近臣も、

黄泉の旅行、随ひ行くこと能はず、

泣く泣く廟所寺に

寺<sub>(陸)</sub>に墓を作り上げ、満慶の尊廟に並べて葬ってさしあげた。住んでおられて放

墳墓を築き、

満慶の尊廟に並べ葬り進らせけり。

住み棄て給ひし

棄されたご邸宅を寺院のように整備して、永寿阿闍梨<sub>(漆)</sub>の住居とし、供養をお営

御館を寺院の如く補理いて、

永寿阿闍梨の住み所とし、

教養作善し

みになった。父祖父から次々と受け継ぐ靈劍の蜘蛛切<sub>(捌)</sub>・鬼丸<sub>(玖)</sub>、並びに柘花

給ひけり。

父祖相承の靈劍、

蜘蛛切

・

鬼丸、

並びに柘花女より

女から授けられた水破・兵破・雷上動、早黄葉の直垂<sub>(拾)</sub>は、嫡男頼国が相続し、

伝えられし、水破 ・ 兵破 ・ 雷上動、

早黄葉の直垂は、

嫡子頼国相伝あり、

摂津国兵庫浦<sub>(拾壹)</sub>に新宅を作り、ここにお住みになったのだった。

摂津国兵庫の浦に新宅を造り、

此に居住せられけり。

---

## 注釈

※壺・天禄元年、満仲朝臣が職を辞した後、十七歳で家業を継ぎ……第 94 話「満仲朝臣移多田致仕付渡部綱事」を参照。

※貳・千丈が岳の妖鬼を鎮圧し……第 127 話「洛中大風日吉神託事」～第 133 話「頼光朝臣上洛勘賞事」を参照

※参・伊吹山の凶賊を成敗し……第 136 話「伊吹山凶賊被滅事」を参照。

※肆・市原野の狡童を誅殺し……第 134 話「市原野狡童為源頼信被虜事」、及び第 135 話、「頼光朝臣狡童子誅戮事」を参照。

※伍・鎮守府將軍……蝦夷を鎮圧するために陸奥に置かれた役所の長官。

※陸・廟所寺……現兵庫県川西市多田神社を指す。第 142 話「満慶入道薨逝事」を参照。

※漆・永寿阿闍梨……頼光の四男。

※捌・蜘蛛切……名刀膝丸のこと。詳細は第 108 話「頼光朝臣瘡病事付土蜘蛛退治事」を参照。

※玖・鬼丸……名刀髭切のこと。詳細は第 106 話洛中妖怪事付渡部綱斬捕鬼手事及び、第 131 話「酒呑童子退治事」、第 132 話「大江山城落事」を参照。

※拾・柵花女から授けられた水破・兵破・雷上動、早黄葉の直垂……第 122 話「頼光朝臣自柵花女伝弓矢事」を参照。

※拾壺・摂津国兵庫浦……現神戸市の海側か。

---

源頼光逝去のお話でした。

鬼魅と関わり、勇士を使役し、多くの戦いに挑んだ英雄の最期でした。

私が『前太平記』を手にとったのは、「酒呑童子を退治した源頼光はどんな人なのだろう」という疑問からでした。その当時は本作に描かれるものは「史実」だと思い込んでいたので（流石に酒呑童子退治をそうとは思っていませんでしたが、）、本作を読めば源頼光を知ることができると思っていました。けれども、この物語は創られたもので、作者が思い描いた夢でした。だからこそ、私はこの物語から、「知りたかった源頼光」を知ることが出来たわけではないのだと思います。しかし、私は「“酒呑童子を退治した源頼光”がどんな人だったか」を知ることができたのだと思います。

この物語での源頼光は、作中の言葉を使えば「尋常ならぬ人」、つまりは「普通ではない人」として一貫して描かれます。本当は普通の人だったと思うのです。悪鬼を討伐する力も持たず、人智の外にある郎等を従えることもなく、菩薩の化身でもなく、歴史の教科書に載るような普通の平安貴族だったのだと思います。

ですが、物語の中の彼は、必ずと言ってもいいほど、「普通ではない人」。

「普通ではない人」だからこそ、彼は鬼を退治することができたのだと思います。

彼は本来悪鬼を倒すべき人ではなかった。英雄となるべき人ではなかったのだと思います。

けれども、彼は多くの物語で、その役割を担い続けた。

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトの URL（月下庵/<https://www.gekkaan.com/>）をご記載いただけましたらご自由にしていただいて結構です。※※※

本来その役割を担うはずではなかった彼の名前には、英雄としての役割が求められた。

源頼光は、「悪鬼を倒す」という役割を担うため、「普通ではない人」であることを、望まれ続けた人なのではないでしょうか。

それが、「酒呑童子退治の英雄源頼光」なのだと思います。

本作の彼は、「尋常ならぬ人」と表現されながらも、「特別な人」であっても「普通ではない人」とは言い切れないと私は思っています。

郎等を信頼し、七年ぶりに出会った人との再会い唸り、ただ一人で生きてきた同い年の青年に名前と居場所をやり、力強い存在が仲間となる予兆を喜び、妻を愛し、友と交流し、凶賊に日々を侵された人の身の上を悲しみ、弟の恋を応援し、未来ある子の成長に一喜一憂する。

これは私の思想ですが、そんな本作の彼が、「普通ではない人」とは言っただけだと思いません。

彼は本来「普通の人」だったと思います。悪鬼を倒す人ではなかったのだと思います。

けれども、彼は悪鬼を倒すことを望まれた。その役割が彼には求められた。

「普通ではない人」としての側面が必要だったから、彼は鬼を退治させられた。

「鬼退治の英雄」の正体は、そういうものなのではないかと思いません。

とりとめのないことを語りましたが、このお話をアップした今日、2021年7月24日は、源頼光の新暦命日に当たります。

上記の通り、彼が亡くなったのは治安元年、1021年です。本年が彼の没後千年です。

前太平記の訳を始めたのは私が15歳の時。もう12年になってしまいました。

12年もかかりましたが、源頼光の人生を、「現代語訳」という形ではありますが、私の言葉で描くことができました。

私は、やはり源頼光が好きなのだと思います。

彼と出会えたことで私の人生は鮮やかなものになりました。

彼との出会いは、私の人生の誇りです。

私は彼の物語を愛しています。

英雄性が、おそらくは永遠に求められるであろう「人としての彼」を、私は求めたいと思います。

だからこそ、こうして言葉に残させてください。

「人」であった貴方の魂が、鬼退治の英雄となったことは、たとえ伝説であったとしても、どれほど恐ろしかったことでしょうか。

人智の及ばぬ敵に挑むことを求められた貴方の魂は、この千年どれほどの孤独の中にいたことでしょうか。

ありもしない恐ろしい悪鬼の首を搔いたことで、卑怯者と罵られた、人である貴方の魂は、どれほど悲しかったことでしょうか。

貴方は人だ。ただの人間だ。それなのに、恐ろしい悪鬼を退治してくれてありがとう。千年間、物語の中で、多くの人の命を救ってくれてありがとう。

私は貴方に「お疲れ様、ありがとう」と言いたい。千年間、多くの人に望まれて、英雄となってくれてありがとう。

たとえ物語の上でのそんな貴方が夢であったとしても、夢として存在し続けた貴方の名前は本物で、そうして存在し続けたことは、とてもとても尊いことだと思います。

私にとって貴方はやはり英雄です。

「鬼退治の英雄」です。

そんな貴方をこの物語で知りました。

貴方のことが、ずっとずっと大好きです。

次のお話は、源頼光四天王の最期です。

私が愛した彼らの物語を、最後まで私の言葉で紡ぎたいと思います。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m(\_\_)m

公開：2021/7/24  
海熊童子